

# 私の夢

富岡市立妙義中学校

三年 阿光 聖奈

四月。一つ学年が上がり、新入生や転入生、新しい先生など初めて会う人と自己紹介をすることが多くなる。自己紹介の定番ともいえる将来の夢。私はこの将来の夢について考えることが嫌いだ。なぜなら、私には夢がないからだ。

小学校低学年の頃、私にはパティシエや水泳選手、学校の先生などたくさん夢があった。漫画やアニメのように自分の夢は必ず叶い、好きなものに囲まれて幸せに過ごせると思っていた。しかし、小学校も高学年になると、だんだんと現実を目を向けるようになる。「私には大きすぎる夢だった。私になれるわけがないんだ。」と夢を諦めてしまう。好きなものはあるけれど、仕事にしたいほど好きでも、お金を稼げるほど得意でもない。

私にとっての将来の夢は、なりたい職業から、なれそうな職業、給料が高い職業へと変わっていった。

中学二年生になって、職場体験学習で私は小学校に行った。両親が小学校の教員で、学校に行く毎日学校の先生と接している私にとって「先生」とは最も身近な職業だった。だから、大変さは何となくでも理解しているつもりだった。しかし、実際に行ってみるとその大変さは予想以上だった。特に大変だったのは一年生と遊んだことだ。一年生は明るく素直で、すぐに仲良くなれた。初めは静かに読み聞かせを聞いてくれたが、そのうち走ったり、教室から出て行ったり、けんかを始めたりと騒がしくなってしまった。普段、小さい子と接することがなく、みんなをまとめることも苦手な私は、どうしたら良いかわからずとても慌てた。その場は先生が来て静かになり、ほっとしたが、自分が何もできなかった無力感や悔しさ、迷惑をかけてしまったという思いでいっぱいだった。「やっぱり私には無理だ。きっと何に

もなることはできない。」私はこれまで以上に、将来のことを考えることが嫌いになった。

そんなとき、私はある本に出てくる言葉を思い出した。周りの人は夢があり、夢に向かって努力しているが、そんな人たちと対照的に自分には夢がないと悩む主人公。私も夢に向かって努力している友達と、夢がない自分を比べて劣等感を感じることがあり、主人公の気持ちにとっても共感できた。その主人公に友達が言った「夢がないのはどん詰まりじゃなくて、今から何にでもなれるんだよ。」という言葉だ。

この言葉は夢を諦めかけていた私に希望を与えてくれた。夢がないとは、そこで行き止まりなのではなく、その先に無数の選択肢があるのだと思わせてくれた。それまでの夢がない＝悪いことという考えを変えさせてくれた。

数日後、私は母と夢について話した。私が夢がないことを相談すると、母は、

「将来の夢は知っている職業からしか選べない。世の中には知らない職業がたくさんあるんだか

ら、落ち込むのはまだ早いよ。」

と言った。確かに私が知っている職業はほんの少しだ。その中で何をする仕事なのかを理解しているのは本当に少しだけだ。その少しの職業だけを見て、できる仕事ややりたい仕事がないと悩むのは、ばからしいとさえ思えた。これから出会う職業には、むいている仕事ややりたい仕事があるだろうと思えるようになった。将来のことを考えるのが嫌いだったが、今は楽しくなった。

今でも私には、はっきりとした夢はない。しかし、以前のように夢がないと悩んだり、劣等感を感じたりすることはなくなった。先は行き止まりではなく、自分は何にでもなれる。そう思うと、将来は何をしているのだろうかと考えたときにわくわくした。楽観的だと思うかもしれないが、将来に不安を感じて落ち込むよりずっと楽しいと思う。そして、いつかやりたい仕事、向いている仕事を見つけないかと思う。

みなさんには将来の夢があるだろうか。